

学 会

東京女子医科大学学会 第269回例会

日時 昭和62年2月19日(木)午後2時より

会場 東京女子医科大学中央校舎1階会議室

1. 各種肺疾患における血中補体 C_3a ・ C_5a 値の変動

(第2病院内科)

木下美登里・〇和顕 房代・渡辺 晴雄

(自治医大呼吸器内科)北村 諭

補体系は、免疫応答の一環を担うとともにARDSやアナフィラキシーショックの際にも、その変動が惹起されるといわれている。

今回、健常者および各種呼吸器疾患患者の血漿中補体 C_3a ・ C_5a 値を測定し、その後、呼吸不全の実験モデルとして家兎を用い、エンドトキシンショック・吸引性肺炎・空気塞栓を惹起させた状態において、血漿中補体 C_3a ・ C_5a 値を測定した。肺癌・慢性気管支炎・肺結核・間質性肺炎の患者では、健常者に比較して C_3a ・ C_5a 値ともに有意な上昇が認められた。また、家兎実験においては、正常状態に比較して、各病態時での C_3a ・ C_5a 値は有意に上昇した。

以上より、各種呼吸器疾患により引き起こされる呼吸不全の状態では、補体系の反応が活発であり、なかでも C_3a ・ C_5a 値の動向をみることにより、呼吸不全の発症を早期に予知できる可能性が示唆された。

(座長)竹宮教授：小幡教授から木下先生についてお話がございませう。

小幡 裕：この演題は、昨年8月に亡くなられた木下美登里先生が病氣と闘いながら、和顕先生と一緒にやりになった仕事です。学会長から、木下先生のエピソードを紹介して頂きたい、とのお話があり、渡辺晴雄教授も今日所用のため出席されなかったので、私が代りまして木下先生のお話をいたします。

木下先生は54年に本学を卒業され、同年第2病院の渡辺教授の所へ入局され内科学の研修を終えて呼吸器内科学を専攻されておられました。

お聞きしたところによると、60年の6月頃から心窩部痛の症状が現われましたが、大変研究熱心な方で胃潰瘍だろうと思われて、抗潰瘍薬を服用しながら研究を続けられ、休むことなく、週末にも自治医大へか

けて実験を続けておられました。

また、オーストラリアの国際会議にも参加され発表されています。

60年の12月に精密検査を受けられ、その時に胃癌(スキルス)と診断されて、昨年1月癌研究会附属病院で梶谷先生の執刀で手術をうけ、一旦退院されてその後は自宅で療養されておられました。4月には福岡の学会に行かれ、点滴を受けながら発表されたということでもあります。

また、木下先生の研究内容は高く評価され、61年7月の“医学のあゆみ”(Vol 138, No. 4, p 236)のmedical topics欄に掲載されています。この論文を投稿された頃から病状は進行して、昨年8月から第2病院内科へ入院され、同僚の方々の手厚い看護を受けられたのですが、8月24日に永眠されました。

木下先生は病苦と闘いながら研究、教育を熱心に続けられ、若くして逝かれました。渡辺教授以下教室の先生方から大変惜しい人を亡くしたと悔やまれています。惜しんでも余りあるような気がいたします。

本日は御両親もご出席頂いておりますが、親友の和顕先生に生前の研究成果を報告していただき、木下先生もさぞ草場の蔭で喜んでおられることと思います。

ここに学会を代表してご冥福をお祈り申し上げる次第です。

2. Crow-Fukase 症候群の1例

(神経内科)

〇江島 光彦・太田 宏平・松宮 晴子・
佐々木彰一・小松崎 聡・岡田 経子・
池沢 道子・降矢 芳子・白田 明子・
村上 博彦・小林 逸郎・竹宮 敏子・
丸山 勝一

Crow-Fukase 症候群は、ギランバレー型多発神経炎、浮腫、腹水・胸水、皮膚変化として色素沈着、剛毛、皮膚硬化、内分泌障害として女性化乳房、陰萎、無月経、耐糖能異常を示し、M蛋白、骨髄腫など免疫グロブリン異常、肝脾腫、リンパ節の腫大、その他微

熱、多汗、ばち状指と神経系のみならず他の多彩な症状を合併する。欧米に比し本邦報告例が多く、現在まで100例余りの報告がされている。最近当科で本症候群と考えられる症例を経験したので報告する。症例は48歳女性、主訴：両下肢の筋力低下、起立歩行障害。現病歴：昭和61年6月末頃、足底で砂を踏んでいる様な知覚異常が出現。同時に顔がむくみ、白い小丘疹が足底を中心に体幹や上肢に認められた。その数日後より下肢の筋力低下を自覚。徐々に増強し、9月中旬には歩行不能となり当科入院。入院時、拡張期心雑音、胆嚢腫大、下肢の浮腫、血管腫、ばち状指、肘・手掌の色素沈着が認められた。神経学的には、下肢遠位部優位の筋力低下と筋萎縮、上下肢深部腱反射の低下ないし消失、両足趾の異常感覚と下肢振動覚の低下、上肢の姿勢時振戦が認められた。検査所見では神経伝導速度の低下、体性感覚誘発電位の潜時の延長、髄液蛋白細胞解離、高 γ -グロブリン血症、胸部X-pで左第10肋骨硬化像、同部位のテクネシウムシンチグラムおよびガリウムシンチグラムでの陽性像、耐糖能異常、高脂血症、血中17KS高値、出血時間の延長、又心エコーで大動脈閉鎖不全、腹部エコーで胆石症が指摘された。しかし、M蛋白は血清、尿ともに陰性であった。また第10肋骨生検を実施し、病理学的に形質細胞腫を確認した。以上の所見と、他に多発性神経炎をきたす明らかな原因のないことから、Crow-Fukase症候群と診断した。Crow-Fukase症候群は多彩な症状を呈するが、一般にM蛋白を認める事が多く、本症例のようにM蛋白陰性例はまれと考えられたので報告した。

3. 乳幼児の気質と母親の神経症傾向

(小児科) ○望月由美子・原 仁・山口規容子・福山 幸夫

我々は乳幼児の気質の決定に関与する要因の分析を試みている。いわゆる high risk infant の気質は健康児のそれと比較していかなるかたよりを示すのであろうか。

今回は high risk infant (1歳児) 52例の気質の検討と、気質に関与する母親の神経症傾向を Cornell Medical Index 健康調査表 (CMI) を用いて調査した。

従来の報告の通り、high risk infant には「育てにくい子」(Difficult) が多いという結果が得られた。さらに CMI との比較では、Difficult 児により CMI の II 型が多く認められた。

これらの結果に、母子相互作用の立場から考察を加える。

4. 膠原病患者の妊娠と児の予後

(皮膚科) ○岡村理栄子・西本 直子・月本 厚美・肥田野 信

当科通院中の女性膠原病患者の妊娠・出産歴と児の予後について調査した。

SLE24名の平均年齢は42.3歳で平均発病年齢は33.8歳、うち既婚者が19名、妊娠していない2名を除き発症前妊娠は38回、うち死産2回、自然流産は7回(18%)、発症後妊娠は8回、うち早産3回、自然流産は1回(12.5%)と高率であった。PSS14名の平均年齢は55.8歳、平均発病時年齢は46歳とSLEより高く、発病前妊娠が54回と多く、うち早産4回、自然流産10回(18.5%)であった。Sjögren症候群4名では、平均発病時年齢は39歳、発症前妊娠11回中死産1回、早産2回、自然流産2回(18%)であった。皮膚筋炎3名では平均発病年齢は31歳で発病後妊娠2回中1回正常分娩であった。

児の予後に関しては1例IgA腎症がある以外は正常でSjögren症候群患者の子2名に抗核抗体陽性、又、2回の胎児死亡と1回の早産後発症したSLEの患者もいた。

5. イソトレチノインの催奇形性

(循環器小児科)

○三浦 正次・安藤 正彦・高尾 篤良

Vitamine Aによる催奇形実験は、古くから報告されているが、心臓奇形に関する文献は少ない。最近 isotretinoin (13-cis-retinoic acid) を服用した婦人より生まれた胎児に頭蓋顔面、心臓、胸腺、中枢神経系を含む特徴ある奇形が報告された(Lammerら、1985)。そこで本研究では、isotretinoinを妊娠ラットに腹腔内投与し、ラット胎仔で作成された心血管奇形を中心に検討を行なった。心奇形ラット胎仔43例中16例(37%)に複雑心奇形が認められた。すなわち共通房室弁口遺残、総肺静脈還流異常、両大血管右室起始、左室性単心室、大血管転換などである。これらの症例では、肺および気管の右側相同を示すものが多く、腹腔臓器の位置異常や脾臓が低形成を示す例も見られた。以上のことより本剤はラット胎仔で内臓心房錯位症候群に類似した心奇形を誘発することが示唆された。

6. 当院におけるHBウイルス母児間感染予防例の検討

(消化器内科) ○古川みどり・久満 董樹・小幡 裕